

Title	白井先生とわたし
Sub Title	
Author	志村, 節子(Shimura, Setsuko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1982
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.44, (1982. 12) ,p.380- 383
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	白井浩司教授記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00440001-0380

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

だ。しかも近くの古都アビニオンでは演劇フェスティバルを開催中である。それも、なんと、サルトルの『悪魔と神』をフランソワ・ペリエの主演で上演していた。この作品も実は白井先生が教本に使われ、私たちは四苦八苦して和訳をさせられたものである（先生の名訳がまだ出版される前だったので、従ってアンチ、ユ、コもなかった。確か、新学期から始めて、夏休みに入る直前に、やっと主人公ゲッツが登場したので、私は当時、こんなに主人公が長期不在で、観客は退屈しないのかしらと余計な心配をした記憶がある。ところが、夜九時、南仏名物のミストラルの吹く中、野外劇場の幕が開くや、退屈する暇もあればこそフランソワ・ペリエ紛するゲッツが、マントを翻がして登場したのである。つまり私たちが三か月近くもかかって読みすすんだ部分を、名優たちはたちまち演じてしまったというわけだ。

これは勿論、白井先生に罪はない。先生の指導も空しく私たちにサルトルを読みこなす能力が、特に語学的能力がなかったからにすぎない。

それが今、曲りなりにもフランス語との縁も切らず、私は自分なりの完璧な瞬間、“冒険”を求めながら生きている。私にとって、大学時代は、決して人生の“休息所”だけではなかったわけだ。白井先生、どうもありがとうございました。

（夕刊フジ勤務・翻訳家・昭和三十八年仏文科卒）

白井先生とわたし

志村 節子

1

一年間の日吉での教養学部時代が終わったとき、私は仏文にしようか美学にしようか、決めかねていた。三田の専門学部選択のガイダンスを受けると、当時、仏文を率いておられた佐藤朔先生と白井浩司先生の説明があった。仏文にはフランス文学を勉強する人ばかりくる必要はない、演劇でも音楽でもなんでも構わない、自分のなかから自然と湧きでるものを育てていこうとする人がき

てくれれば嬉しいし、そういう人が実際になにかを創りだしていきけるような場にできればいいと考えている。ガイダンスの要旨は確かそんなはなしだった。

事実、仏文にはそんな自由な雰囲気があったように思う。

2

仏文を卒業したあとと全く別の分野の大学に入り直し、三年程フランスに留学した。さまざまの関係から切り離されて自分の判断だけで積み重ねていく時間をもてたことは、今から考えても実に貴重な経験だった。

私は学生時代を含めて以前の年月を記憶の底に沈めて過した。

そんな留学から帰国したある日、白井先生から、気軽な集まりがあるから出てこないかとお誘いがあった。私は、授業にもあまり出ず、周囲に対し奇妙にぎこちなかった学生の頃の自分を思い出して、正直のところ気がすすまなかった。

そんな危惧にもかかわらず白井先生の会はとても愉快

な集まりだった。出版社のS先輩、サントリーのY氏、新聞記者のM氏、編集者だったTさんなど職業も年令もさまざまな元教え子が白井先生を囲んで勝手に飲んで喋ったりしていた。先生を含めていずれも生真面目、優等生、権威主義からもっとも遠いような人たちのくつろいだ会だった。先生の頭の中はサルトルやカミュやら難しい言葉でいっぱいのはずなのに、その会での先生は風にとよぐ草とも冬のことなど考えたこともないキリギリスともみえた。

「昔の教え子のことはすべて忘れる。いつまでも覚えていられたら間の悪いものですよ。」と教師生活の長い森有正氏が言っていた。白井先生もまさにその通りで、いつも「現在」を大切になさっているように見える。あまり良い学生だったとは言えない私には大変気の楽な師である。

3

先生の最大の魅力はあの自然体である。黙って坐っておられるだけでなんとなく笑いを誘うユーモラスなとこ

ろである。先生御自身が意図したものではない自然ののびやかさが周りにはユーモラスにうつるのかも知れない。御本人は真面目なのである。ただ生真面目ではないだけだ。

「今度の校長先生は全く仕方がない。修学旅行で、生徒にまでビールを飲ませてしまうのだから。」と女子高のガチガチ女教師のU先生がふんがいていと友人が言った。「それ、もしかしたら白井先生のことじゃないかしら」と思わず私たちは言った。私たちは融通のきかない、まさに味気ない女学校の教師の典型だったU先生の悲憤慷慨のていを想像しつつ、一方では「女子高の校長」というイメージにおよそ収まり切れない飄々とした白井先生に快哉を叫んだものだった。そして白井先生や若林先生がもし私たちの頃の校長であられたら過ぎし昔はもっと楽しかったらうと、今でも後輩たちを羨む気持ちである。

その後白井先生にあったとき、「あの校長は先生のことでですか？」ときいたことがある。先生は体を揺らせて

アハハと笑いとばされただけだった。間違いない白井先生だったと確信するが証拠はない。

4

大分前のことだがいつもの先生を囲む会の集りで、二次会にどこかのバーに行ったことがあった。もうずいぶん遅い時刻で先生もかなりアルコールが入っていた。たまにたまそこで容貌魁偉な旧知の老人に出くわし、先生とその老人は何やら話をはじめた。はじめはテーブル越しに肘などついて話していたが、その内となり同士で坐り込み、両者すっかり手を握りあってなにやら感無量といった光景であった。一緒に居た友人がおかしくてたまらぬといった様子である老人は田辺茂一氏で、両者とも、自分分は若い女の子の手を握っていると錯覚しているのだ、と説明してくれた。まことにふたりとも自然流であった。先生は田辺氏と仲よく手をつないで何を語りあっていたのだろう。もしかしたら田辺氏のあまり面白くない駄じゃれに神妙に相づちを打ち、時折仕方なく笑っておられたのかもしれない。細やかで思いやりのある先生

はひとに悪意で接することができない。

先日どこかの会合でかなり酩酊した人が面倒くさい繰りごとを先生に述べ、からんでいた。うんざり顔の私たちが尻目に先生は一生懸命、丁寧にもと変わらず「そうですね」などと言いながら相手をされていた。その男が言いたいだけ言って消えたあと、ひとり言を言うように私たちに「彼はね、からんでいるわけではない。ただ一寸酔っているだけなのですよ。」と言うのだった。

そのような先生の細やかな心づかいは全く自然に何気なくなされるので、受けた本人もその時は気づかないで通りすぎてしまう。けれども注意ぶかくふりかえてみると、先生の暖い心くばりがいかにもゆきとどいて示されているのにあらためて気づくことになる。

サルトルやカミュなどの難しい先生のフランス文学研究もさることながら、われらが愛する白井先生の根っからの自然体だけは誰のものでもない先生本来の得がたい思想だと思っている。

(画家・昭和三十九年仏文卒)